

こ え は がき  
古**絵葉書**に見る  
東海の**富士**



百年前の富士山麓めぐりへご案内。  
-富士とともに暮らす人々の原風景がここにある-

# 古絵葉書に見る東海の富士

## 目次

はじめに	p. 2	49.玉江町(沼津市)	p.38
1.田子の浦(富士市)	p. 3	50.蛇松(沼津市)	p.39
2.河合橋(富士市)	p. 4	51.千本浜(沼津市)	p.40
3.西横町(富士市)	p. 6	52.内浦(沼津市)	p.41
4.今泉(富士市)	p. 7	53.大瀬崎(沼津市)	p.41
5.日吉神社(富士市)	p. 8	54.中之島水族館(沼津市)	p.42
6.依田原(富士市)	p. 8	55.静浦(沼津市)	p.43
7.鈴川駅西(富士市)	p. 9	56.鮎壺の滝(沼津市/長泉町)	p.44
8.鈴川の茶園(富士市)	p.10	57.最勝閣(静岡市)	p.45
9.足踏み水車(富士市)	p.10	58.清水港(静岡市)	p.46
10.柏原の農家(富士市)	p.10	59.網打中の富士(静岡市)	p.46
11.田子の浦橋(富士市)	p.11	60.清水波止場(静岡市)	p.47
12.左富士(富士市)	p.12	61.羽衣橋(静岡市)	p.48
13.新橋(富士市)	p.13	62.三保の松原(静岡市)	p.48
14.中吉原(富士市)	p.14	63.三保貝島(静岡市)	p.49
15.国久保(富士市)	p.14	64.駅売り茶第1号(静岡市)	p.49
16.大淵街道(富士市)	p.15	65.安倍川橋(静岡市)	p.49
17.大淵茶園(富士市)	p.16	66.薩た峠(静岡市)	p.50
18.加島の餅つき(富士市)	p.16	67.静岡歩兵第34連隊(静岡市)	p.50
19.富士駅付近の脱穀作業(富士市)	p.17	68.御殿場付近(御殿場市)	p.51
20.富士駅前(富士市)	p.17	69.御殿場市街(御殿場市)	p.52
21.青島付近の田園風景(富士市)	p.18	70.萩原(御殿場市)	p.52
22.入山瀬(富士市)	p.18	71.御殿場の富士(御殿場市)	p.53
23.下駄の出荷(富士市)	p.19	72.アメリカ村(御殿場市)	p.53
24.龍巖淵(富士市)	p.20	73.太郎坊(御殿場市)	p.54
25.浮島沼(富士市)	p.21	74.佐野瀑園(裾野市)	p.54
26.スイホシ跡(富士市)	p.22	75.水上の富士(三島市)	p.55
27.天の香久山(富士市)	p.23	76.複葉機飛来(三島市)	p.55
28.雁堤(富士市)	p.23	77.農兵踊り(三島市)	p.56
29.富士川橋(富士市)	p.24	78.新町橋(三島市)	p.56
30.水神の森(富士市)	p.25	79.反射炉(伊豆の国市)	p.57
31.富士川渡船(富士市)	p.25	80.二見が浦の富士(三重県)	p.58
32.富士川通船(富士市)	p.26	81.片瀬滝口山の富士(神奈川県)	p.58
33.富士川船着場(富士市)	p.26	82.稚児ヶ淵の富士(神奈川県)	p.58
34.聖牛(富士市)	p.27	83.高麗山(平塚市/大磯町)	p.59
35.岩淵(富士市)	p.28	84.君津橋(木更津市)	p.60
36.岩淵駅前(富士市)	p.29	85.奥宮(富士山)	p.60
37.富士川運河(富士市)	p.30	86.富士山郵便局(富士山)	p.61
38.岩淵に行く機関車(富士市)	p.30	87.東宮殿下登山(富士山)	p.61
39.神田川(富士宮市)	p.31	88.野中観測所(富士山)	p.62
40.星山丘陵の茶園(富士宮市)	p.32	89.夕照の富士山上(富士山)	p.62
41.ペニー会社(富士宮市)	p.32	90.高田スキー隊(富士山)	p.63
42.大宮の農家(富士宮市)	p.33	91.剣が峰(富士山)	p.64
43.芝川の吊橋(富士宮市)	p.33	92.砂走(富士山)	p.64
44.陸軍少年戦車兵学校(富士宮市)	p.34		
45.湊橋(沼津市)	p.35	COLUMN	
46.御成橋(沼津市)	p.36	絵葉書の年代判定	p.15
47.桃郷(沼津市)	p.37	私製絵葉書のはじまり	p.42
48.我入道(沼津市)	p.38	著作権について	p.59

はじめに

富士山麓に暮らす私たちは、秀麗な富士の懷に抱かれた景観の点景として生きています。東海の富士には、富士とともに生きる人々を包み込む暖かさがあります。陽光に照らされて美しいスロープをひく姿は実に女性的であり、繊細な白糸の滝、三保や千本松原の白砂青松の景とよく似合います。また重畳と連なる山並みのかなたに見せる優美な姿もよいもので、古来より優れた借景としても取り入れられてきました。



古絵葉書の世界には、ひっそりとした田子の浦に映る逆さ富士の景色や、松林をすかしてみる清見瀉が金糸銀糸にさざめき、そのかなたに夕陽に映える富士のある景色など、今日みられない、さまざまな富士の美しい表情がみられます。これら景観が、富士のふところに抱かれつつ生きてきた人々に影響を与え続けてきただろうことは、想像に難くありません。



左の絵葉書は、明治40年ごろの大宮（現在の富士宮）を写したのですが、豊かで清らかな川の流れ、美しい村、そして雄大な富士がやさしく優しく包み込む中を、村の子供らが遊んでいます。

富士山に抱かれた山麓の人々の暮らしの原風景がここに 있습니다。そしてこの子らもまた、時代時代の富士の恵みの中で生きています。

古絵葉書を見ることは、失われた景観を検証することだけではありません。我々も、百年前のこの子ら同様、富士の恵みや、富士をめぐる過去からの様々な文化的背景の中で生き続けていることを知ることであり、また、未来に向け我々の子孫もそうなるであろうことを知ることであり、その普遍性を柔らかくつないでくれる存在が、実景としての古写真中に見られる、今も昔も変わらぬ優美な東海の富士といえましょう。

平成25年4月30日 イコモスによる登録勧告を受けて  
著者記す

## 1. 田子の浦（富士市）



山部赤人「田子の浦うち出でてみれば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける」で、古来有名な名勝「田子の浦」。まるで仙境への入り口だ。

田子の浦は、古くは興津川から現在の田子の浦あたりまでの地域を指し、詠じた場所としては、眺望が急に開け、裾野から立ち上がる富士の雄大な景が初めて見える蒲原の「七難坂」説が有力。しかしその後、赤人は、蒲原駅(かんばらのうまや)から柏原駅(かしわばらのうまや)に官道を東下したのであろうから、まさしく、このあたりの景も目にしたうえで、長歌および反歌のイメージをふくらませたと考えるのが自然ではなかろうか。

さて、水面には「逆さ富士」が映っており、左手には貨物船が数艘、碇泊



しているが、伊豆方面からの新鮮な魚類を運ぶ伊豆船や、遠州相良から石灰岩を運んできた遠州船が吉原湊に出入りした。当時、入山瀬にあった富士製紙で漂白に石灰を多く使った。また正面奥の石水門は、沼川の逆潮を防ぐため明治 18 年に築かれたもので、「六ッ眼鏡」という愛称で親しまれた。しかし、昭和 42 年、田子浦港築港の折、惜しまれつつ取り壊された。

## 2. 河合橋（富士市）



河合橋は、鈴川駅(現 JR 吉原駅)北方 200M、沼川にかかる東海道の橋。橋の上の馬車は、鈴川-大宮間を結んだ富士馬車鉄道で、明治 23 年開業。当時、富士郡南部唯一の交通機関だった。橋の上には、北に向かって右側に幅 2 フィートの線路がひかれていた。そのため、鉄道馬車は左側通行、馬力は右側通行に見える。橋を渡った左手の家には、ライオンと仁丹の看板。その脇の松だけが、最後まで切られずに残されていたという。左下にススキが見えることから、季節は秋だろう。明治 35 年ごろ。



川向うの家がなく、また、橋の欄干の親柱の形状が馬車鉄道のものより新しそうだ。明治末の風俗が面白い。

\*フランスで描かれた河合橋



唐人お吉の  
ポートレート  
撮影をした静  
岡出身の写真  
師・水野半兵  
衛による撮  
影。欄干が斜め  
格子になって  
いる。

この写真を  
もとにして、  
フランスで日

本の東海道の橋を描いた異国情緒あふれる絵葉書が作られた(下)。



富士はいよよ堂々とし、鮮やかな緋と紫の服を着た女性が、左上からの光線に当てられ、チラチラ橋を渡っていくところである。欄干の直線に沿って視線を左へ移していくと、うっそうとした松の巨木の緑陰に、寄り添うように鄙びた茶店。店先では二人連れが雄大な富士を眺めつつ一服入れているところである。川面も澄み切っていて美しい。山紫水明が、ここでも表されている。光と影が、いささか印象派を思わせるタッチだが、西洋人の日本の風光に対する憧憬はこのようなものであったのかもしれない。

### 3. 西横町（富士市）



明治末の富士市吉原の西横町。この道は東海道である。人力車には子供が二人。既に電気が通じており、各店先には電灯。吉原町に電気が通じたのが明治41年。左手は鍋宗呉服店。その隣は醤油屋。大正初年には、鍋宗呉服店は瓦葺に変わる。

祝日だろうか、国旗が掲げられている。奥の森は、現在、吉原公園となっているところで、当時は日吉浅間神社があった。突き当たりの店(車夫の笠の上)は、内藤金物店で、いまなお同所にて営業なさっている。右手電柱近くの角は、現在、つけナポリタンで有名な喫茶アドニスさんの場所にあたる。時間は影の方向から、お昼ごろ。店店の前には、写真撮影が珍しかったのだろう、人々が出てきている。

下は現在の同地。建物は変わったものの、間口三間の区割は残っている。



(平成15年10月19日撮影)

#### 4. 今泉（富士市）

背景の丘陵の様子、街道、河川の様子から今泉地区と思われる。田を耕すのに牛を使っていたのだろう、牛が枯れ草を食んでいる。左手に水車房。湧水豊富な今泉地区の根方街道沿いの撮影。画面中央は根方街道。次の写真は、やや西側からの撮影。



大正4年測図 25000 分の1「吉原」

右の写真は場所が特定されている。決め手となったのは、左端の地蔵。いまいづみ幼稚園南西の地蔵橋際にある「道仙子育地蔵尊」の地蔵がそれだと思われる。

地域の信仰があれば、石造物も処を得て残るものだ。





## 5. 日吉神社（富士市）



明治末頃の富士市今泉の日吉浅間神社。かつて東泉院という密教寺院が併設されていた。中央やや右手は富士病院で、明治15年、板垣退助が岳南自由党に招かれ、自由民権の演説会を行った場所(当時は保全病院と言った)。同年、岐阜事件が起こる。左端が宮司の六所家で、全国的にも貴重な聖教(しょうぎょう:経典の注釈や寺院での儀礼などの記録)が伝えられてきた。貴重な理由は、本来、口伝の形で伝えられるべきもののためらしい。

中世においては、このあたりに善得寺城が築かれていた。武田信玄、北条氏康、今川義元の甲相駿三国同盟の舞台となった城跡である。三将が直接会したのではなく、それぞれの使いが会し、甲駿同盟および甲相同盟の再確認、並びに相駿同盟の締結(氏康の娘の氏真への輿入れ)が行われたと考えられている。

## 6. 依田原（富士市）



東海道筋を南から撮ったものと思われる。富士山のちょうど下には吉原町他七カ村組合技芸学校(現在の県立吉原高校)とおぼしき建物が写っている。

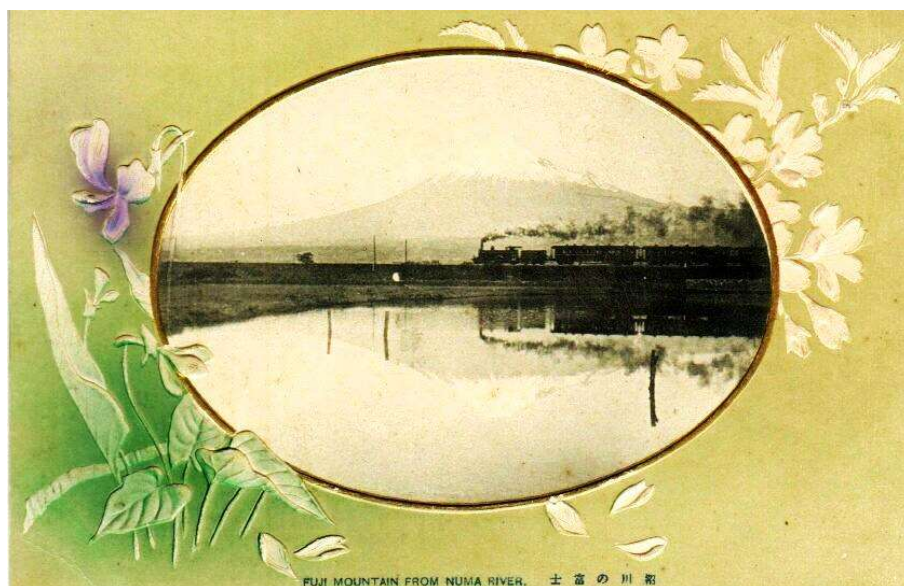
手前の和傘は屋号が入っていないので、油を塗った後、乾かしているのだろう。農閑期の家内工業だったのだろうか。珍しい構図。

## 7. 鈴川駅西（富士市）



鈴川駅(現 JR 吉原駅)西方の沼川に架かる橋を、鉄道院 5700 形と思われる汽車が通過中。場所特定の決め手となったのは、宝永山の噴火口の形状、左端の毛無山塊の写りよう、明治三十年代の古写真に見られる橋脚の土台などからである。この橋のすぐ南に架かっていた潮止橋(六ツ眼鏡)から撮影したものと考えられる。波紋のようすから、満ち潮になりつつある時刻の撮影のようだ。

次葉は、逆さ富士とのシンメトリーの間を駆け抜ける汽車。



## 8. 鈴川の茶園（富士市）



「大宮より富士遠望」となっているが、宝永噴火口のように、浮島が原のようにすなどから柏原附近からの撮影。明治20年側図同35年修正版図には、鈴川駅東南に茶畑の記号があり、この地で小規模な茶畑が営まれていた様子がうかがえる。オリジナルはA. ファサーリ撮影。

## 9. 足踏み水車（富士市）

ヤマトとよばれる足踏み水車。ふつう、田植えが終わってから秋の彼岸の頃まで、4、5日ごとに田に水を入れたそうだが、これはどうやら、沼川へと通じる堀に排水しているようだ。さらに堀から沼川へ排水する部分にも堰が見られ、水害と戦った当時のこの地域の人々の苦労が偲ばれる。印刷は新しいが、元写真は明治後期～大正時代の撮影とみられる。



## 10. 柏原の農家（富士市）

柏原地先の農家。浜風による飛砂防止のためなのか、南側のひさしを大きくとっている。右下にはサトイモの葉。



## 11. 田子の浦橋（富士市）



この木橋は明治4,5年に吉原湊口に架けられたものである。旧東海道は、鈴川-依田橋-吉原宿-青島-平垣-松岡-富士川渡船場というルートだったが、街道を行き来する人にとっては、鈴川-吉原湊-前田-柳島-五貫島-富士川渡船場というルートのほうが4kmも近くなるので、県はこのルートを「便道」と唱え、県道とした。しかし、その後、高波で破壊されてからは船渡しに変わり、さらに明治22年の東海道線の開通により、この便道を利用する人はいなくなり、明治24年に県道は廃された。1880年代の撮影。

下の写真では欄干が高くなり橋脚の支えがついていることから、幾分年代は下りそうだ。



## 12. 左富士（富士市）



「東海道五十三次」中の「吉原」にみえる「左富士」。広重は道中日記に「原・吉原は富士山容を観る第一のところなり。左富士、京師より下れば右に見ゆ。江戸よりすれば反対の方に見ゆ。一町ばかりの間の松並木を通して見ることは絶妙の風景なり」と記している。江戸から京に上る際、富士は常に右手に見えるが、この区間では富士の間近で左手に見えることから名所となったらしい。

明治44年8月9日および10日の消印があるこのはがきでも、東海道に沿って、松林が続いており、広重の絵の世界が残っている。

文面には、豪雨が降ると大出水し、洪水の恐ろしさを始めて知ったとか、富士川が氾濫しそうだと言いつつ半鐘を乱打しているなどと書かれており、当時、この地域が水害に悩まされていた様子がわかる。



現在、周辺には工場や住宅が立ち並び、浮世絵に見るのどかな風情は感じられないが、ただ一本残る樹齢二百年と推定される老松が、往時の面影をわずかに偲ばせている。

左写真は、現在の「左富士」。道が先で左にカーブしている。

（平成15年10月1日撮影）

### 13. 新橋（富士市）

「新橋」は旧東海道吉原宿の東にあった和田川に架かる橋。この橋を渡って左手にしばらく歩くと、吉原宿の東木戸があった。右端の店には街道筋で人が通るからなのだろう、「菓子」と書かれており、子どもたちが集まっている。

「新橋」は現在「平家越（へいけごえ）橋」と名前を変えている。

これは、治承四年（1180年）、源平の富士川の合戦のとき、武田信義軍の水鳥の羽音に驚いた平家が敗走した場所との伝承からである。

『吾妻鏡』治承四年十月二十日には平家が敗走するさい「印東次郎常義者、於鮫嶋被誅」ある。現在、「鮫嶋」は田子の浦港のすぐ西に地名が残ることから、ほぼ現在の潤井川筋の本流を挟んで源平が対峙していたのではと考えられる。また約百年後の『十六夜日記』にも弘安2年（1279）、阿仏尼が富士川を渡った際、「明けはなれて後、富士川渡る朝川いと寒し、数ふれば十五瀬をぞ渡りぬる」とある。ボーリング調査などの結果からも、富士川の流路は、かつていくつにも分岐し、当時この辺りは一面の湿地帯だったと推定される。

さて二枚目の写真では、右の店先に馬が一頭。橋の中央には富士を眺める人物が一人。川面に映った逆さ富士も美しい。左の石材は、明治～大正末にかけて、井出重作商店が吉原湊から運んできたもの。これが和田川の最後の水運となった。左の建物に屋号が見える。和田川も、鎌倉御家人の和田義盛が富士川合戦の折、柵を築いたことから名づけられたという。



（平成 24 年 10 月 30 日撮影）

#### 14. 中吉原 (富士市)

1639年から1680年にかけて、吉原宿はこのあたりにあった。

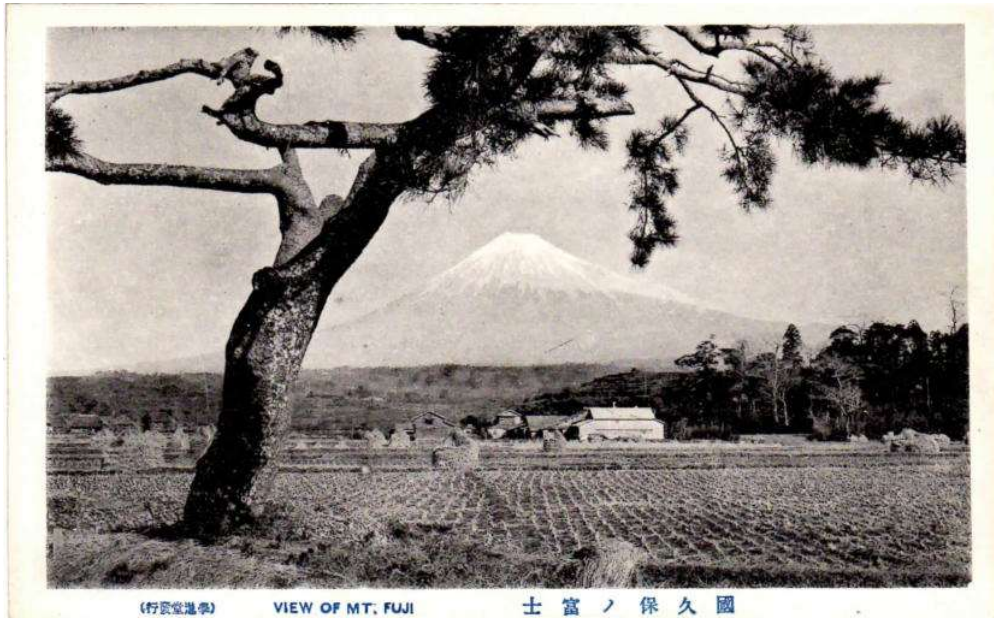
1680年、高潮が吉原宿を襲った時、人々は写真中央に見える左富士神社の杜に逃げ込んだ。杜は海に浮かぶ島となり、100名以上が亡くなった。1755年、村人は災害を後世に伝えるため、記念碑を神社に建てた。

街道はこの先、右に緩くカーブし、左富士の名所に行き着く。

明治23年開業の富士馬車鉄道のレールが敷設されており、葉書の仕切り線が1/3であることから、明治後期から大正前期の撮影。



#### 15. 国久保 (富士市)



国久保の地形を考えると、右手の森は、現在、吉原公園のあるところで、中央の建物のあたりが富士南麓製紙業発祥の地。明治12年、柏森貞作が手漉き和紙工場を創業したものの、外国産の高価な苛性ソーダを利用したためコスト高となり、長くは続かなかった。その後、和田川の水を利用して水車を回し、精米業を営み、また富士山麓の山葡萄から葡萄酒の製造を試みたりしたという。

手前の松は「明治末期の吉原町の地図と思い出(矢部新作)」の絵図に描かれているものようだ。

## 16. 大淵街道（富士市）



「吉原ヨリ…」となっているが、松並木がないので東海道筋ではない。丘陵の様子や富士に対する道筋や手前を左右に流れる川の様子も併せ考えると、現在の吉原郵便局東側、旧大淵街道が和田川を横切るあたりからの撮影にみえる。このあたりは大宮(富士宮)の方面への分岐にも近く、右端では客待ちの車夫が一服入れている。中央は馬丁が戯れに、嫁入り風に荷台に乗っているところである。

### COLUMN 絵葉書の年代判定

絵葉書の年代判定には、発信印・到着印のほか文献調査、新旧比較、実地調査、聞き取り調査などのほか、絵葉書の形状の変遷からも撮影年度がある程度、推測できる。たとえば、もともとオモテ面には宛名だけを書くことが想定されていたのだが、明治40年(1907)に下部3分の1以内に通信文の記載が認められた。大正7年にはこれが1/2に拡大、さらに昭和8年以降「郵便はかき」が「郵便はがき」となる。

また、時代とともに印刷技術も向上し、まず墨刷りと色刷りの石版画に始まって、その後、コロタイプ写真製版になり、さらに手彩色絵葉書が登場する。大正～昭和期にはモノクロ写真に人工着色したオフセット多色刷りが普及する。

以上を総合的に判断して、年代判定を行う。



## 17. 大渕茶園（富士市）



明治7年、清水の次郎長は、山岡鉄舟や静岡県令・大迫貞清（おおさこさだきよ）に勧められ、静岡監獄江尻支所の囚人らを正業に就かせる目的で、彼らを使って富士山南麓の開墾を行なった。

開墾地は標高 350m 付近で、当時の畑作地の上限くらいだったが、水不足の中で荒地と格闘する日々が続き、脱走する者が出始めた。これによって次郎長らによる開墾はいったんは挫折するが、かわって地元の人たちが



加わるようになると、開墾は順調に進み、明治17年には約76町3反（約78ha）の畑作地が、現在の富士市大渕に完成した。その後、明治21年民有地払い下げで40町歩は「高島開墾」となり、36町3反が「次郎長開墾」となった。次郎長らの功績は大きく、後にこの一帯は次郎長町と呼ばれるようになった。

明治39年の消印がある。

## 18. 加島の餅つき（富士市）

富士山の谷筋を見ると、加島あたりで撮られたものようだ。腰ひもをしっかりと締め、腰をいれてついている。見事な柴垣や奥に数棟見られることから、ここは豪農の庭先のようなのだ。小作人の婦人たちが搗いているのだろうか。



## 19. 富士駅付近の脱穀作業（富士市）



左手に岩本山がみえ、また、中央に富知六所浅間神社の屋根が見えることから、旧東海道沿いの青島町のあたりの撮影と思われる。

千歯扱きが見られるが、藁はすでに結束されており、脱穀作業は、ほぼ、終了。男衆は引き上げたあとか。右端の女性が箕を高く掲げ、残った秕（しいな）を、さらに風で選別しているようにみえる。

## 20. 富士駅前（富士市）



明治末期の富士駅前。軌道は富士馬車鉄道で、明治42年富士駅開設とともに、長沢まで連結された。右手は福島屋、左手は加嶋館。明治45年7月21日の記念印。

## 21. 青島付近の田園風景（富士市）



(東西方向)の道が東海道。富安橋のやや東側か。

赤ん坊を負った女兒が二人、石の橋を渡っていくが、江戸時代の道中記には、吉原宿から富士川渡船場までの間に石の橋が幾十もあったと記されているそうである。

現在、錦町交差点近くの植え込みに、発掘された石の橋が置かれており、表面はつるつるに摩耗している。

撮影場所は、画面中央やや右手のこんもりした森に注目すると、「19. 富士駅付近の脱穀作業」の写真とほぼ同じ場所での撮影。

吉原宿から富安橋手前まで東海道は南西方向に通うのだが、キャプションの「東海道の富士」より、画面左右



## 22. 入山瀬（富士市）

「吉原郊外の富士」となっているが、富士山の剣が峰の位置や谷筋、さらに富士山に対する川の角度、川幅なども併せ考えると、入山瀬付近の撮影のようだ。

長崎大学附属図書館には、さらに古い時代に同所から撮ったと思われる写真があり(目録番号 1135)、二軒並んだ農家の左手には曾我寺(富士の巻狩のときに仇討ちをした曾我兄弟の位牌、木像がある)と思しき建物が見られる。



川には堰がみられ、水位を高くして田に水を引き込んだ。稲刈後の畑には、早速、畝が見えるので、この畑では二毛作を行っていたようだ。農家の右手では、農夫が二人、なにやら立ち話をしている。

左手の川沿いの道には轍(わだち)をつけながら馬車がゆっくり上っていく。ガラガラという馬車の音と川の水音とが、清澄な田園の空に抜けていく。

## 23. 下駄の出荷（富士市）



割り下駄ではなく、足駄の甲良(差し歯下駄の台)を大八車で運んでいるようだ。静岡特産の塗り下駄の下地づくりが、かつて鷹岡から富士宮にかけて行われていた。撮影地は、元写真のキャプションに「SANDOBASHI SURUGA」とあることから、三度橋(今の富安橋)付近。

ところで、なぜ彼らは静岡の反対方向に運んでいるのだろう。

どうやらそのカギは、先頭の引き役の'頭'にありそうだ。よく眺めると、なんとマゲを結っている。1871年に断髪令が出されたので、この写真は、ひょっとしたらそのころ撮られたものかもしれない。東海道線も未開通なら、蒲原運河もない。陸路、静岡まで運ぶのは、困難な時代。逆行するようだが、いったん吉原湊に運び、海路、清水港まで運んでいたと推測される。

明治初頭のこの地域の下駄出荷量は不明だが、ちなみに大正8年、大宮町(現、富士宮市)では12社が下駄を生産しており、27750円の出荷額がある(富士郡大宮町史)。



## 24. 龍巖淵（富士市）



富士市鷹岡入山瀬の潤井川の龍巖淵からみた富士。豊かな水量がうかがえる。古くは富士登山の下山時にすぐ下に流れ込む凡夫川の合流点あたりで水垢離し、凡人(凡夫)となって西国に帰ったという。現在でも凡夫川橋近くに石の祠が残る。

手前の建物は、富士製紙の社



宅。富士製紙がこの地に工場を建設したのは、明治23年のことで、当時、鈴川駅(現, JR 吉原駅)から入山瀬を通過して大宮(現, 富士宮)まで鉄道馬車が開通したことが契機であった。また、この地は、富士山大沢崩れを源とする潤井川の豊富な水資源が利用でき、富士山麓のモミ・ツガが利用できること、豊富で安い

労働力を得やすかったこと、交通の利便性、消費地である都会に近いことなども、工場立地の背景となった。ここ龍巖淵には、かつて吊り橋があり、この写真は、この橋上から撮ったものだろう。

## 25. 浮島沼（富士市～沼津市）



広重描く東海道五十三次の「原」と、ほぼ、同じアングル。子どもたちが舟遊びしている。

排水設備が整う昭和40年ごろまで、富士市～沼津市にかけての愛鷹山南麓の低湿地帯・浮島ヶ原では、北に愛鷹山、

南に砂丘があるため、雨水が海に排水されないばかりか、遡潮による塩害に苦しみ、大雨や高潮時には、一面湖のようになることがあった。これを地元の人々は「シラウミになる」と言った。こうした浮島ヶ原に開かれた湿田を「ドブッタ」といい、胸や腰まで浸りながら大変な苦勞をして田植えや稲刈りをおこなった。その際、水田に出掛けたり刈り取った稲を運ぶなどの農作業には川舟が利用された。

またウナギやコイ、フナなどの漁撈にも川舟は利用された。柏原付近は昔から漁業が盛んで、『東海道中膝栗毛』でも弥次・喜多が、浮島ヶ原を通り柏原でうなぎの匂いを嗅ぎ嗅ぎ、「蒲焼のにはほひを嗅ぐもうとましやこちら二人はうなんぎの旅」としゃれている。三島で護摩の灰(盗み)に遭った難儀を受けたもの。

さて、この写真では、たしかに少年たちが川遊びに興じているが、このような家業を手伝ってのうえのことであろうから、操船もなかなか堂に入っているのである。

二枚目の写真は1907年10月5日の消印のあるもの。上とほぼ同位置からの撮影。東海道からでも撮ったのであろう。



## 26. スイホン跡（富士市）

放水路の向こうに架かる橋が東海道。

江戸時代、原の米作りは「五年一作」といわれるほど、浮島が原の水害や遡潮による塩害に悩まされつづけてきた。

慶応元年(1865)、増田平四郎は、20年間におよぶ陳情の末、ようやく幕府から浮島が原の掘割工事の



許可を得、工事を開始する。ところが慶応2年(1866)、完成後半年で、土用波に破壊され失敗。平四郎は失意のうちに没する。

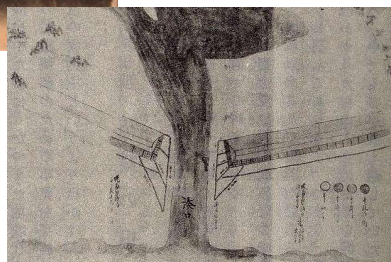
こうして昭和十八年(1943)、平四郎が掘り割り工事をを行った時から約八十年の歳月を経て、全く同じ場所に「昭和放水路」が完成した。近代測量技術を以てしても最適地が全く同じ場所だった点に、平四郎の目の確からしさが裏打ちされたといえよう。

現在、昭和放水路脇には、放水路を見下ろす増田平四郎の石像が立ち、碑文には、次の歌が刻まれている。

「ありし世の、人のほまれを浮島の 沼のほとりにたつも石文」



なお、遡潮を防ぐ努力としては、西比奈村の名主・野村一郎が、慶応二年に吉原湊口に防潮堤を築いたが、それとおぼしき写真があるので掲載しておく。



## 27. 天の香久山（富士市）



吉原湊から出入りする富士講の人々は、鈴川海岸で水垢離してから、天の香久山(富士塚)に小石を一つずつ奉げ、富士登山の安全を祈願したという。現在の「富士山登山ルート 3376」の原型がここにある。

さて、吉原湊口は時代ごとに場所を変え、万治3年(1660)以前には富士塚の東、

今井あたりに位置していたとする記録があり、仮にそうだとすれば、今井は吉原湊口を見下ろす要衝にあり、三方を沼や川、海に囲まれた軍事上の拠点にもなりえたと想定される。

天文14年(1545年)8月16日、今川義元は、河東(静岡県東部)を占拠し「吉原の城」(今井の砂丘か?)にいた後北条勢を打ち負かすが、そのきっかけとなったのが、「今井狐橋の戦い」である。右の写真は「今井狐橋」と思われる写真。現在でも、今井の日本製紙のパイプライン下に橋脚が残る。



## 28. 雁堤（富士市）

雁堤(かりがねづつみ)に行く農夫と馬。雁堤は、岩本山の裾から松岡水神社に至る延々2.7kmに及ぶ大堤防で、その形が雁が連なって飛んでいる姿に似ていることから名付けられた。



富士川の流れは江戸時代の始めまで加島平野(現富士市)をいくつもの支流をつくって流れ、度重なる洪水は田畑に損害を与え、人々を苦しめていた。そこで洪水を制する大堤防を造るべく、中里村の古郡氏は、親子孫の三代にわたり富士川の治水に尽力しこの雁堤を完成させ、「加島五千石」と呼ばれる沃野を誕生させた。この治水事業はたいへんな難事業で、そのため神に加護を祈るための「中島天満宮」の創建とか、「人柱伝説」などが、今に伝わる。

なお古郡氏の子孫には、福井県鯖江を流れる日野川の治水を成功させたものの費用超過の責任をとって切腹した者や、加島でとれた餅米で安倍川餅をつくり、将軍吉宗に献上したところ気に入られ、江戸城西の丸留守居役にまで出世した者も出ている(『耳囊』)。



## 29. 富士川橋 (富士市)



Fuji from Fuji-kawa.

富士ノ川土富士

なにやら風に乗って、子守唄でも聞こえてきそうである。橋のかなたにあるものを見つめながら、やがて二人は画面の下手へとゆっくり去っていく。その一部始終を、富士が温かく見守っているのだ。母子と富士山との空間の取り方が絶妙で、詩的な効果を生み出している。

中央に点々をつづく並木は、雁金堤。子守の女性の右手は水神の森のようだ。とすると、場所は、国道1号富士川鉄橋のある場所の、やや、下流側か。

撮影時期は、この葉書の表面 1/3 が通信欄となっていることから明治40年以降大正7年以前。富士川には、それまで木橋が架かっていたが、流されては架け、流されては架けを繰り返し、ようやく念願の富士川鉄橋が架かったのが、大正13年のことであった。

橋の上の様々な往来。米を荷車で運ぶ人、人力車で渡る人、欄干で小休止する人、天秤棒を担いだ農夫と、その農夫と話をしている人。それらの人々が富士を前にして間隔よく並んでいるだけでなく、橋の下には通船と渡船も。リズムよく何重にも揃っている感がある。



FUJI MOUNTAIN FROM IWAFUCHI.

富士の淵岩

### 30. 水神の森（富士市）



「大井川・・・」となっているが、水神の森。正しい向きに反転してある。左手には富士川の木橋がみられるが、かなり粗末なので、明治中期ごろの撮影か。増水時なら『五月雨や大河を前に家二軒』の景ともなろう。

### 31. 富士川渡船（富士市）



富士川の渡船。米俵やら荷車やらをガチャガチャと満載している。のんびりした時代の渡船というよりも、生活の力強さというものを感じさせられる。渡船の向こうには通船もみえる。

### 32. 富士川通船（富士市）



富士川の通舟で山梨方面から運んできた米を、これから馬車に載せ、清水湊まで運ぼうとしているところ。通舟、馬車、米俵、秀麗な富士と、4拍子揃っている。

右から二人目の船頭のわらじに注目。鼻緒がずいぶん短いが、これは「足半(あしなか)わらじ」といい、かかとの部分がなかった。すべり防止のためである。また馬子の帽子がシャレているが、個人で町まで買いに行くことはまず考えられないので、富士川運輸会社提携の運輸業者の社員に支給されたものではあるまいか。これなら遠目にもモグリの運輸業者ではないことが判別できよう。

明治 22 年、岩淵駅(現, JR 富士川駅)に通じる運河が造られた後は、富士川貨物は、直接、岩淵駅に運ばれることになったので、撮影時期は明治中期の可能性がある。

### 33. 富士川船着場（富士市）

現在、常夜灯のある辺りにあった富士川船着場。流路の変化により場所が変わったようである。明治 41 年の記念スタンプ。



### 34. 聖牛（富士市）



川原木拾いの写真だが、左手に聖牛が写っている。材木をテトラ構造に組んだ中に蛇籠（じゃかご）を入れ、水を柔らかに受け止め、治水や法面の保護を行うもの。仔細に見ると、水の抵抗を少なくするため、材木の断面を面取りしてある。

護岸の脇に聖牛を並べる伝統工法は、近年、水辺の景観や生き物への配慮から見直され、大井川や富士川水系では、職人たちの手で数十年ぶりに復活している。水の力を利用して脚を底に突っ込むことで、むしろ安定度が増し、さらに隙間があることで水に逆らわず、水をなだめる。こうして水がまともに当たっていた護岸のわきに聖牛がいるおかげで、砂が積もり、木が生えて護岸の植生が回復し、岸がえぐられる心配がなくなるなど効果をあげている。

右の写真では、手前の藁葺きの納屋の中に竹で編んだ「じゃかご（蛇籠）」がみられる。明治末には金網製となり、現在でも垂鉛メッキ鉄線で編んだ同様のじゃかごが用いられている。



### 35. 岩淵（富士市）



岩淵からの富士。石垣下の道は東海道。大正のころ、既に瓦葺きの家があったが、この葉書中の家はすべて板葺きなので、明治中期以前の撮影と思われる。



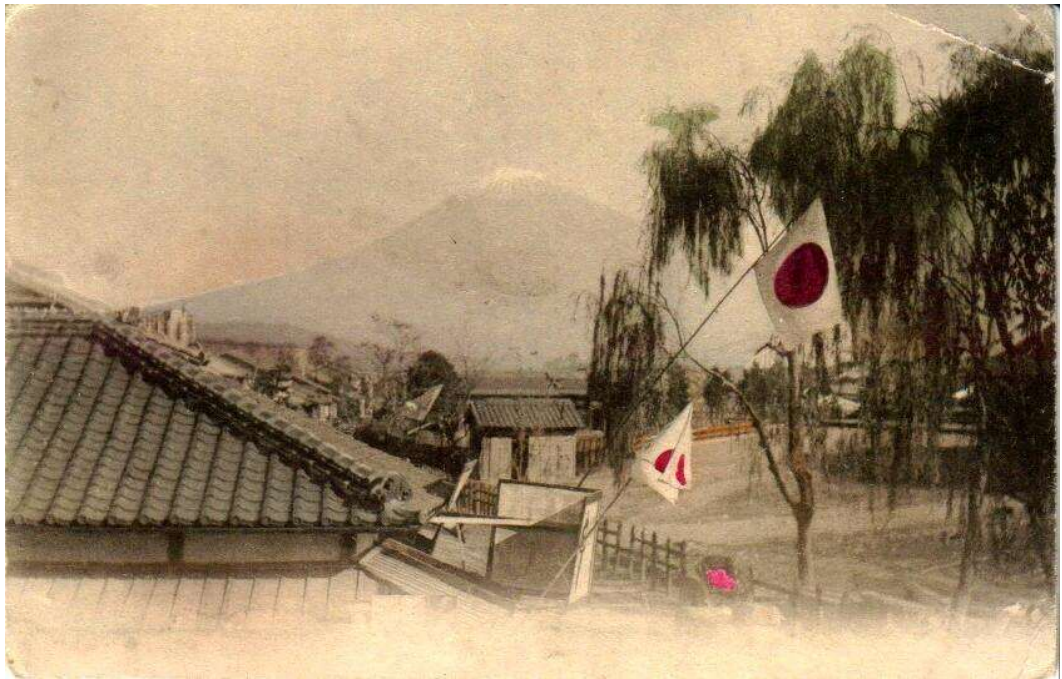
富士川の向こうの並木は、雁金堤に沿った並木。富士川橋がうっすらと見える。旧富士川町役場付近から望遠で撮影したものと思われる。



岩淵の富士。奥に瓦屋根の家々が見られることから明治末ごろの撮影か。



### 36. 岩淵駅前（富士市）



岩淵駅前の様子。富士山の左下に岩本山。岩淵駅(現富士川駅)前にあった谷屋旅館二階からの撮影と思われる。

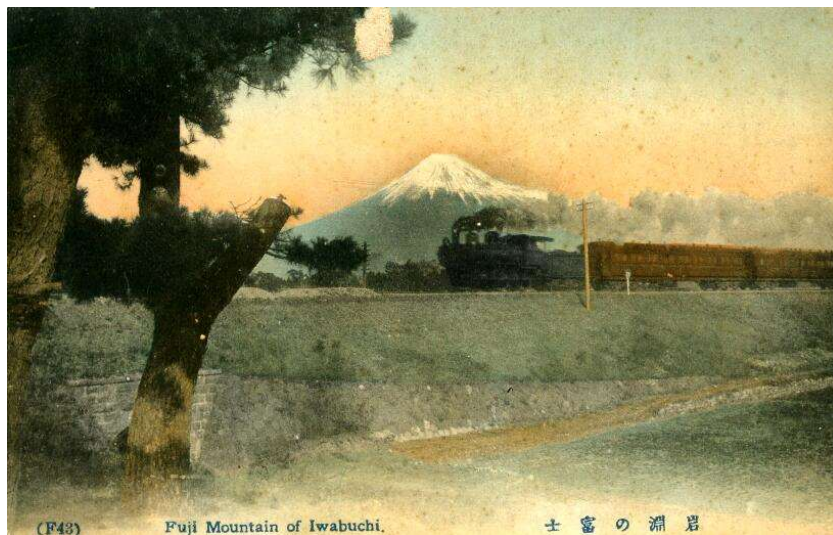
明治30年代、岩淵駅を中心に旅館が百軒ほどもあり、身延山参拝客、富士登山客が月1万人も泊まったという。右手は駅の敷地で、現在、富士川駅前公園になっている所。手前に柳が見えるが、古老は現在でもこの通りのことを「柳通り」と呼んでいる。

### 37. 富士川運河（富士市）



明治5年10月、岩淵と蒲原堀川間の4kmの運河が開かれ、明治8年、甲州鰍沢と蒲原間を舟運する富士川運輸会社が創立された。この写真には甲斐からの通舟がみられ、ここには木材や米俵やらが荷揚げされている。甲州廻米は、この運河を経て堀川運河、さらに清水湊に送られ、さらに大型船に積み替えて東京方面へ向かった。清水市の巴川岸には今でも「甲州廻米置場跡」の石碑が立っており、山梨県の飛び地も存在する。しかし、明治22年の東海道線の開通、さらには明治35年の中央線八王子～甲府間の開通により、この運河は物流の中継地としての使命を終えた。

### 38. 岩淵に行く機関車（富士市）



### 39. 神田川(富士宮市)



日下部金兵衛の撮影。富士宮浅間神社東側あたりの神田川沿いの撮影。清らかで豊かな川の流れ、美しい村、そして雄大な富士がやさしく優しく包み込む中を、村の子供たちが遊んでいる。もし、子供たちが写っていなかったら、この写真の良さは半減していただろう。なお、このはがきは、1912年(明治45年)4月18日に実際にフランスへ送られ、里帰りしたもの。



左写真は、手前が神田川、川に沿っての道が大宮口登山道。御師(おし=山岳霊場ガイド)の宿坊が立ち並ぶ様子。富士登山をする者は、御師の指導により、神田川の水源地、浅間神社の湧玉池で、斎戒沐浴をしてから、登り始めたという。右端の国旗を高く

掲揚した家の暖簾には「写真(写真)」とある。

注目すべきは、左の石柱。これは浅間大社から山宮浅間神社に至る道筋に一丁毎に建てられた標石の首標で、造立は元禄四年(1691)十一月。いつのころか行方不明になったが、昭和59年に大社境内の土中から発見され、現在、湧玉池畔に再建されている。その元の造立場所を示すもの。



#### 40. 星山丘陵の茶園（富士宮市）



「御殿場より…」となってるが、剣が峰が中央に見え、奥がいくぶん下がっていることから星山丘陵で撮られたものと思われる。大正9年の「大日本帝國陸地測量部『五万分一地形圖 大宮』」にも、上高原・下高原に何か所か茶畑の地図記号が記されている。

画面右手には『南無妙法蓮華經』の髭文字が彫られた題目塔がみえる。この地域は大石寺・北山本門寺・西山本門寺などが近いことから日蓮宗が盛んで、たくさんの題目塔があり、日蓮の命日にちなむ毎月12日などに題目講を行った講中によって造立されたものが多いのだそうだ。

#### 41. ペニー会社（富士宮市）

ペニー会社（後のオーミケンシ）の工場。富士宮は富士山の湧き水を利用した製糸の町でもあり、その繁栄の象徴がこの煙突であった。ちなみにペニーとは絹紡糸の半製品のこと。この工場跡地は、現在、イオン富士宮ショッピングセンターになっているが、富士宮駅北の踏切に「ペニー踏切」の名称が残る。

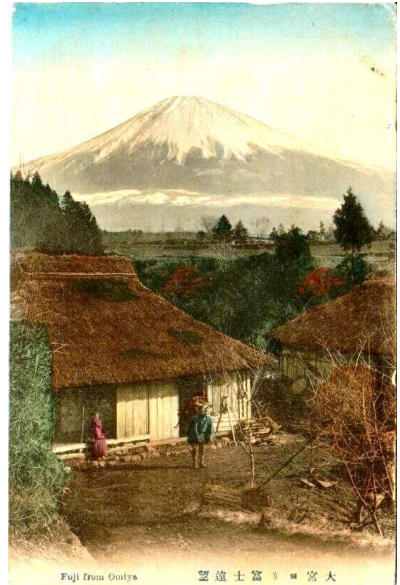


蛇足だが、製糸工場で働く女工が夜食用にやきそばを買い求めるので、時間がたってもものびないように硬めの麺が考案され、これが「富士宮やきそば」となったとする説がある。

## 42. 大宮の農家（富士宮市）

「大宮ヨリ富士遠望」。庭木はまだ芽吹いておらず、また富士の雪を見ると、季節は早春。光の方向から時刻は朝だろうか。軒下の薪の残りも心許なく、これから背負子で薪を採りに行くところのようだ。厳冬期のきっぱりとした空気とは違い、柔らかな早春の朝の、富士のある一幅の絵のようだ。

一段高いところから俯瞰するアングルで撮っており、前方がまた一段高くなっているのので、この家は谷戸にあるようだ。地形からすると撮影地は柚野か。



Fuji from Oniya 望遠富士ヨリ大宮大

左は、姫神松近くの登山道での撮影と思われる。

辺りは風の音以外聞こえない山麓の草原。写真師は農家と富士の構図を整えていた。と、次の瞬間、子供らの歓声が沸き起こる。小枝を振り回しながら、三人、こちらへ駆けて来るのだ。数秒の後、子供らにつかまった写真師の当惑顔があった。



THE FUJI MOUNTAIN 大宮ヨリ富士望遠 (景絶富士)

## 43. 芝川の吊橋（富士宮市）



5. (行 田 島 小) 橋 合 河 川 芝

Cバランスドアーチ橋で昭和11年の竣工。県の歴史的土木遺産に指定されている。

JR 芝川駅近くに架かる現在の芝富橋の場所にあった吊橋。「河合橋」とあるのは、かつて河合村が存在したことから。

現在、芝富橋は中部5県で唯一の列柱式ヴォールトをもつR



芝富橋

#### 44. 陸軍少年戦車兵学校（富士宮市）



陸軍少年戦車兵学校は、昭和17年8月～終戦まで静岡県富士宮市に置かれた、大日本帝国陸軍の教育機関である。機甲部隊の拡充強化のため、14歳から19歳の少年の育成が行われていた。教職員は1,550名。延べ4,000余名の少年が学んだ。写真の戦車兵も、いくぶん童顔が残っている。写真は九七式中戦車。

約30万坪の敷地には、約80の校舎や集会所、軍需工場、車庫、弾薬庫等があり、昭和18年当時、戦車は約80両、自動車類も数十両が配備されており、朝霧高原一帯が演習場として利用された。また隣接地には陸軍病院も併設され、これが現在の独立行政法人国立病院機構静岡富士病院となっている。

当時、少年戦車兵は「若獅子」と言われ、少年航空兵の「空の若鷲」と並び称され、国軍の双璧と讃えられた。一期生150名募集のところに8千余名の応募があるほどの人気ぶりであった。



## 45. 湊橋（沼津市）



左手の橋のたもとに「みなとはし」とある。「湊橋」は明治9年に現在の沼津・御成橋の位置に掛けられた橋で、それまでは、旧沼津町と旧楊原村上香貫の間を、渡船がつないでいた。当時、河岸が港の役割を果たしており、この写真からもその様子がうかがえる。橋のたもとでは人々が集まるからなのだろう、近隣の農家からサトイモやカブやらを持ってきて売っている。もともと楊原地区は気候が温暖なうえに土地が肥えており、野菜栽培が盛んな土地だった。柳の木は古木となり、今なお点々と残されている。なお「御成橋」と名称が変わったのは、原の医師・仙石規氏の研究によれば明治45年7月。ちょうど改元を挟んでのことという（昭和12年静岡県発行『御成橋改築工事概要』）。

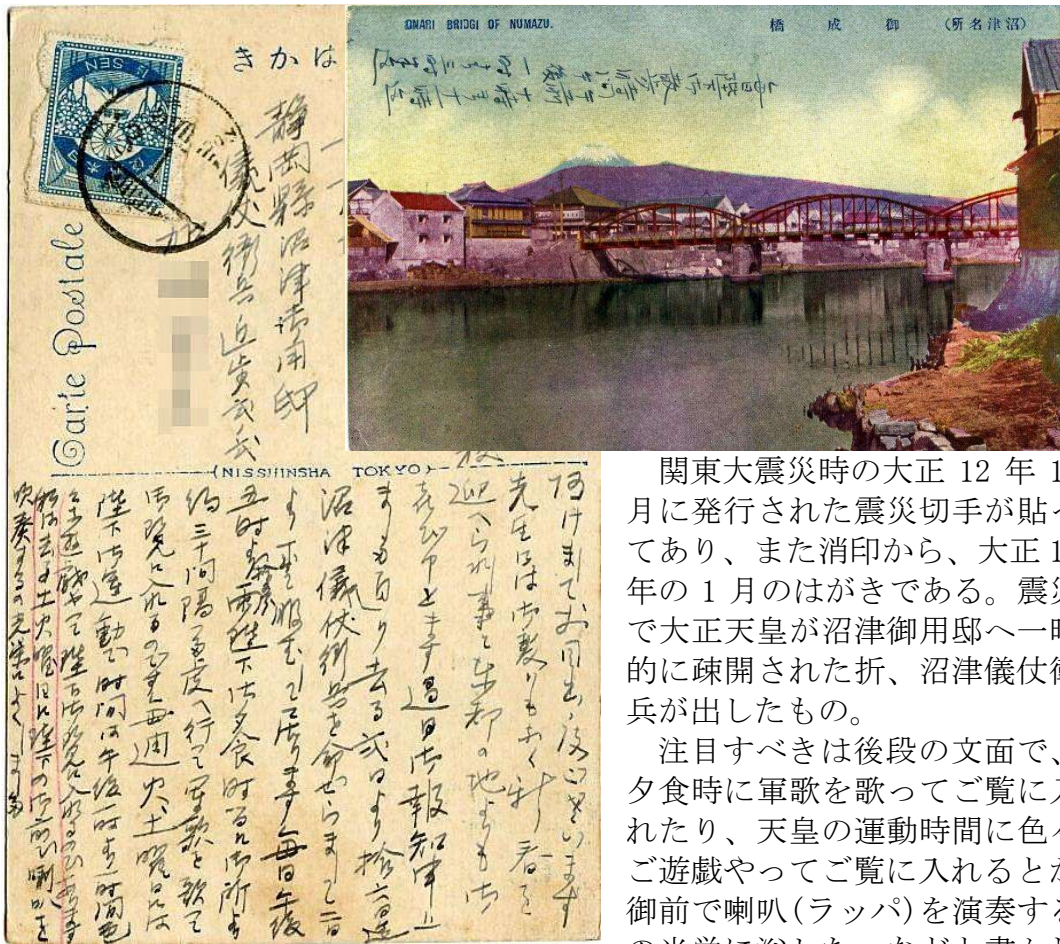


の様子がよくわかる。

「韓国皇太子殿下沼津行啓湊橋御通過之光景」とある。

三島の現在の楽寿園が韓国皇太子李垠(イ・ウン)の別荘としてよく利用されたとのことなので、あるいは、これから向かおうとするところなのかもしれない。李垠はまた三島高等女学校(現静岡県立三島北高等学校)に奨学基金を下賜している。御成橋の前身、湊橋

46. 御成橋 (沼津市)



関東大震災時の大正 12 年 10 月に発行された震災切手が貼ってあり、また消印から、大正 13 年の 1 月のはがきである。震災で大正天皇が沼津御用邸へ一時的に疎開された折、沼津儀仗衛兵が出したもの。

注目すべきは後段の文面で、夕食時に軍歌を歌ってご覧に入れたり、天皇の運動時間に色々ご遊戯やっご覧に入れるとか、御前で喇叭(ラッパ)を演奏するの光栄に浴した、などと書か

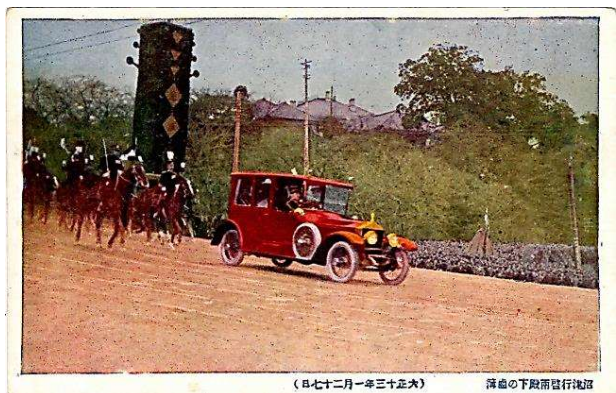
れている。またウラ面(御成橋の写真のほう)には、毎日の陛下の散歩時間が記されており、史料的な価値もあると思われる。

ちょうど、この一月には摂政宮(のちの昭和天皇)がハネムーンで沼津御用邸を訪れられている。それが次の写真である。

「沼津行啓両殿下の鹵簿(大正十三年一月二十七日)」とある。

「鹵簿」とは「ろぼ」と読み、儀仗警衛の隊伍を整えた皇后以下の皇族の行幸の列のこと。

大正 13 年 1 月 26 日、摂政宮裕仁と久邇宮良子の結婚式が宮中で挙行された。その翌日に沼津御用邸を訪れられた際の報道絵葉書。奉迎門が建てられ、賑々しい隊伍の騎乗の列が続く。



(日七十二月一年三十三大)

沼津の下殿帝行儀

## 47. 桃郷（沼津市）



向こうに佇む二人は、桃の花越しに富士を眺めている(愛鷹山の稜線が判然としない)。手前はどうかやらネギ畑で、春ネギならば时期的にはほぼ桃の花の時期と重なる。

もともと牛臥山は島で、下香貫まで海水が入りこみ、島の入り江に面した土地ということで安永年間（1772～1781）までは「島江(とうごう)」とされていた。その後、次第に土地が干拓され入江が無くなったので江を郷に代え「島郷」となった。江戸中期以降、桃の栽培がこの地で行なわれ始め、明治以降、品種改良が行なわれて栽培が盛んになると、地名も「桃郷」に変わる。地元生産農家が、御用邸ご滞在中の昭和天皇に「桃郷の桃」を献上したところ、天皇はたいそう喜ばれ、御用邸ご滞在中、時期になると「トウゴウの桃はまだか」とご下問されたという。

沼津青果様のお話では、現在、桃を生産する農家は 7 件ほどで、うち、市場へ出荷する農家は 2 件だという(2018 年 6 月現在)。



2018 年 6 月撮影



#### 48. 我入道（沼津市）



右から左に流れるのが狩野川。奥に見える橋は富士見橋。昭和8年の沼津港の建設、さらに昭和45年の新外港の建設により、辺りの景観は一変した。

我入道の渡し舟は庶民の足として昭和46年まで続いたが、港大橋の完成でその役目を終えいったん廃止。しかし川風に吹かれながら船上からみる松林の向こうの富士の風光を惜しむ声もあり、観光を目的として平成9年に復活した。

#### 49. 玉江町（沼津市）

沼津市玉江町付近からの撮影。田園の中で夕陽を眺める下校時の女兒たち。北原白秋的な抒情を想起させる光景。向こうに見える煙突は吉田温泉（銭湯）のようだ。オモテ面は仕切り線が1/2で「きかは便郵」となっている。大正8年から昭和7年の間の撮影。



## 50. 蛇松（沼津市）



明治 21 年、静岡県東部の東海道本線建設の資材搬入のため、現在の沼津駅と狩野川の河口にあった昔の沼津港とを結ぶ貨物線が設置された。当時、多くの巨大な資材を運びこむ陸上運送の

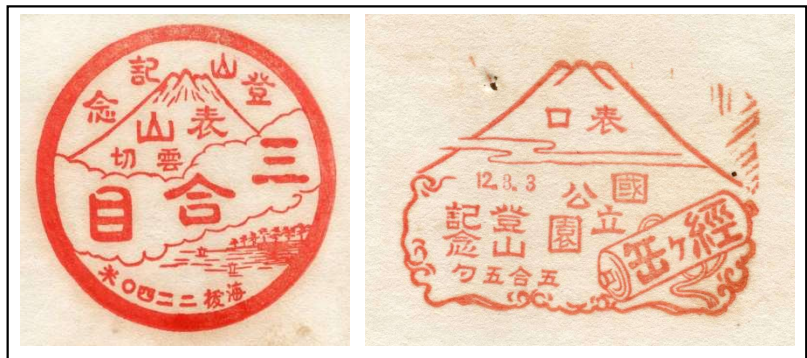
設備を持っていなかったため、必ず港から船で運び込む、という方法を取っていたのである。この貨物線は、終点の狩野川の河口あたりに生えていた「蛇松」にちなんで「蛇松線」と名づけられた。

写真右下に「伝説に名高き蛇松」とあるが、明治 34 年蘭契社刊『沼津の華』によれば、「土人(さとびと)の言(ことば)に樹膚を傷れば則ち流脂(りゅうし)血を成すと蛇松の称蓋し此に出るなるべし」とある。

さて、その「蛇松」は、いったい、いつまで生きていたのだろうか。

一般的には蛇松線建設の折、伐採されてしまったとされているが、上掲書 p. 21 には「十余年前迄は蛇松尚ほ其朽幹を存せしも今は全く腐朽して僅に其名を鉄道敷設の物揚場に止むるのみ」とする。どうやら蛇松線建設の時点で、すでに枯死していたようである。したがって、この写真中の蛇松は、物揚場にあった点を考えると、土手の松の姿に往時の面影を偲ぶことができる、という意味だろう。

現在では、この写真の部分は、沼津港となってしまっており、かつての面影は全くない。蛇松線は、その後、主に石油、木材、魚等を運ぶ貨物線として活躍したが、トラック輸送全盛時代を迎え、昭和 49 年ついに廃止。現在その跡地は、緑豊かなプロムナード“蛇松緑道”として新しく生まれかわり、市民の憩いの場所となっている。





## 51. 千本浜（沼津市）



THE BATHING-PLACE SENPONHAMA, NUMAZU.

浴水海濱本千（勝名津沼）

明治時代の水着はイギリス製のウールが普通だった。当時、ボーダー柄が主流で、“シマウマ”とも呼ばれていた。横縞なのは、編みやすかったことと、目立つからだったらしい。

大きな束髪とは一見、不釣合いのようだが、本格的な日本髪は髪結いで結ってもらわねばならなかったが、この髪形なら自分で結うことができるので、便利だからだったらしい。

当時、千本浜には政財界の別荘が立ち並び、また東京方面からの客を意識した沼津公園東京亭や仙松閣ホテルなどがあった。彼女たちも、都会から避暑にやってきた上流階級の娘たちなのだろう。

今も続く千本浜の地引網のようす。  
大正時代。

近くに住んでいた歌人若山牧水も、友人たちを招き、地引網をしている。

牧水は県の千本松原伐採計画が持ち上がった際、その反対運動の先頭に立って保存を訴えた。牧水が晩年愛してやまなかった富士の景がこれである。



富士の麓本千津沼  
VIEW OF MT. FUJI FROM NUMAZU



JAPANESE SACRED MOUNTAIN FUJI

夫嶽の二不

左の写真は「富士の樵夫」。樵夫とは木こりのことだが、背負子ではなく籠を背負い、熊手を持っている。

千本松原は、地元にとって防風・防砂のため大切な松原だったので、むやみに伐採せず、枯枝を採取し、薪にしていた。

## 52. 内浦（沼津市）



右手に淡島、左手に富士山を臨んだ内浦長浜海岸。漁業が盛んで、中央は魚見の櫓、左手には網小屋が見える。魚見の櫓は、潮の流れや、鳥山から魚群を監視していた。丸いころころしたのは生簀で、カツオ漁の際、いくつか並べ、両側を孟宗竹で挟んで浮きとし、生餌のイワシを運んだ(右写真)。

左手の山は国指定の史跡・長浜城跡で、戦国時代、北条水軍があった。武田水軍との戦いの前線基地となった。



## 53. 大瀬崎（沼津市）



1km 近く海に突き出た大瀬崎には、先端になぜか淡水が湧き出す神池があり、天然記念物のビャクシンの樹林でおおわれている。左端には大瀬神社の鳥居が写しこまれており、例年四月四日の大瀬祭りには、大漁旗を掲げた漁船が駿河湾中から集まってくる。また海底がとても美しいことから、

近年、スキューバダイビングのメッカとなっている。

## 54. 中之島水族館（沼津市）



1930年(昭和5年)、日本で初めてバンドウイルカを飼育した「中之島水族館」(現、「三津シーパラダイス」)の様子。四阿から生簀に身を乗り出して眺めている人の様子がわかる。

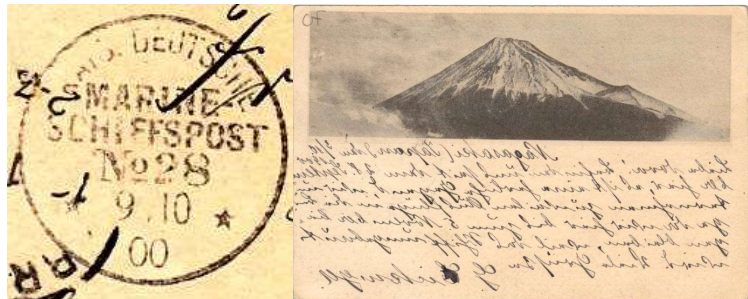
### COLUMN 私製絵葉書のはじまり

日本で私製葉書が認められたのは明治33年(1900)年10月1日。同月10月5日発行の雑誌「今世少年」の附録絵葉書「二少年シャボン球を吹く図」が、これまでのところ最初の私製絵葉書とされている。また最初の官製記念絵葉書は、明治35年(1902年)6月18日に逓信省から発行された「万国郵便聯合加盟二十五年祝典記念」絵葉書。六枚一組五銭で発行された。

絵葉書がさらに一般化するようになったのは、逓信省が明治37年に発行した日露戦争の絵葉書のシリーズもの(全8回,47種)以降のことで、発行日には徹夜の行列ができたという。メディアの限られていた当時、まずはニュース性のあるものが喜ばれた。

いっぽう外国人を対象とした日本土産としても、日本情緒あふれる美しい絵葉書も数多く製作された。とりわけ富士山麓域では、富士山があるというだけで、地元に住む人々のごく普通の生活の一コマ一コマ——農作業風景やら横丁の風景やら橋を渡る人々の様子やら——までもが写し込まれており、これらは今となっては大変貴重な郷土資料ともなっている。

(著者所蔵中、最古の富士山写真絵葉書。1900年9月10日発信印。官製はがきに銅版または鉛版印刷。)



## 55. 静浦（沼津市）



獅子浜と江の浦との境に位置する「大久保の鼻」からの撮影。画面左端に瓜島が見える。瓜島は、かつて西郷従道の別荘があったことから西郷島とも呼ばれた。現在は静浦漁港の整備により、防波堤で陸続きになっている。その右手の松の生えているのが布島。布島の右手奥が沼津御用邸。オモテ面の仕切り線が1/3なので、大正7年以前の撮影。

志下(しげ)付近のようす。静浦は、黒潮に乗って回遊してくるマグロやイワシ漁が盛んだった地域。すぐ北隣に沼津御用邸があって、西郷従道や大木喬任の別荘をはじめ、政府高官の利用した保養館もあり、栄えていた。



56. 鮎壺の滝（沼津市/長泉町）

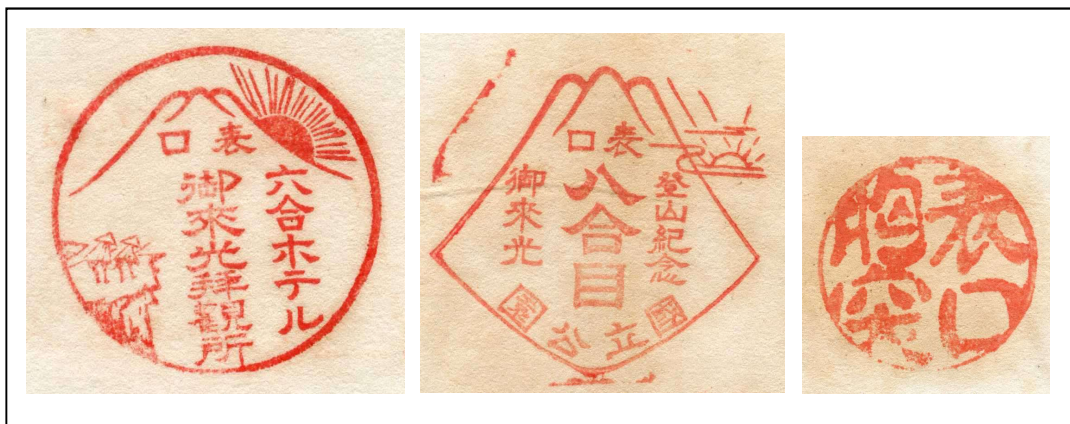


鮎壺の滝は、狩野川支流の黄瀬川中流の滝。三島溶岩流の末端にあたり、溶岩層、溶岩樹型、ポットホールなどが観察できる。上の写真は滝のやや上あたりからのもの。

「鮎壺」という名称は、もともと、ここから遡上できない鮎が滝壺に群がっていたことから名づけられたというが、また、滝壺の水が藍色なので藍壺の滝とも称され、御殿場線の踏切名は「藍壺」となっている。

黒澤明監督作品 七人の侍 のロケ地ともなり、侍たちが村にたどり着く前のシーンで、三船敏郎が沢でアユを手づかみし、岩の上で六人がおにぎりを食べているシーンが撮影された。

現在では、滝の向こうに大きなマンションが建ってしまい、昔ながらの景観は変わってしまった。



## 57. 最勝閣（静岡市）



三保貝島に明治 43 年から昭和初期までであった蒼瓦・白壁の楼閣。日蓮宗の田中智学が建てた。

絵葉書のごとく、ここからの眺めが豊かで素晴らしいだけでなく、最勝閣それ自体が、羽衣橋のかなたに浮かぶ竜宮城のようであったという。松林を透かして見る清見潟が、金糸銀糸にさざめいている様がみてとれる。

ここを訪れた北原白秋も秀麗な景色に感激し、長歌に詠じている。

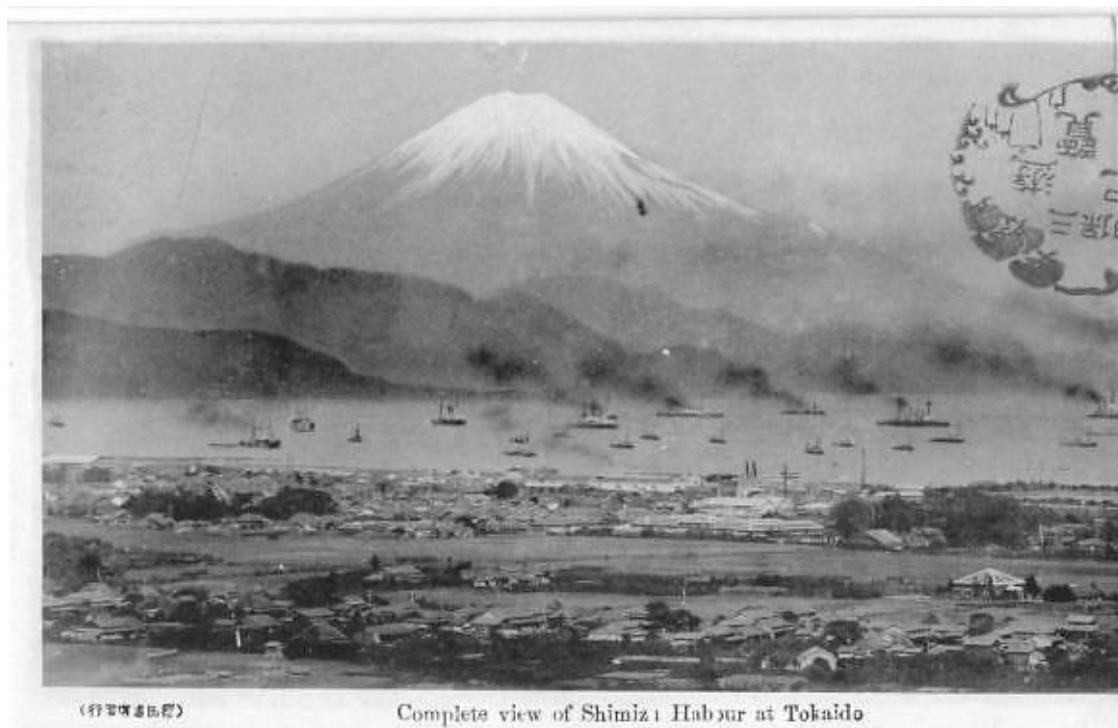
最勝閣に詣でて詠める長歌並に反歌、

風早の三保の浦廻、貝島のこの高殿は、天そそる不二をふりさけ、清見潟みち干の潮に、朝日さし夕日照り添ふ、この殿に詣でて見れば、あなかしこ小松むら生ひ、辺につ寄る玉藻いろくづ、たまたまは棹さす小舟、海苔粗朶の間に隠らふ、この殿や国の鎮めと、御仏の法の護りと言よさし築かし殿、星月夜夜空の隈も、御庇のいや高々に、鐸の音のいやさやさやに、いなめの光近しと、横雲のさわたる雲を、ほのぼのと聳え鎮もる、閑けくも畏き相、畏くも安けき此の土、この殿の、高き墓のあやにすがしも

反歌

この殿はうべもかしこししろたへの不二の高嶺をゆたかにぞ見る

## 58. 清水港（静岡市）



はがき2枚続きの大きさ。富士見寺として知られる竜華寺からの眺め。

この葉書は、撮影日がわかっている。画面全体に黒煙を上げているのは、大正9年3月29日、旗艦榛名を始めとする大日本帝国海軍第二艦隊が清水港に入港したときの様子である。当時の新聞は、黒鉛が湾内一杯にたなびいたと報じている。

遠景は、向かって左手から、清見寺～薩た峠～富士山～愛鷹山。右手、巴川河口から貝島にかけて「羽衣橋」がかかっており、さらに羽衣橋の上には「最勝閣」も写っている。

江戸の情緒あふれる風光から近代工業国家へ変貌しつつある、まさにその時代の様子が伺える。

## 59. 網打中の富士（静岡市）

富士を一網打尽！

船の沈み具合、左下の細波の様子から、海岸でやってもらったものだろう。面白い構図。





## 60. 清水波止場（静岡市）

1枚目の写真は明治末ごろの清水波止場。先端にあるのが清水税関。魚問屋とあるのは、現在の清水魚市場の前身で、芝野栄七の経営。その左手、わずかに屋根が見えるのが、清水の次郎長が営んでいた「末廣亭」。芝野栄七と次郎長とは隣同士で非常に仲がよく、次郎長は明治26年に亡くなるまで末廣亭に住んでいた。以降、末廣亭は、お蝶、さらにその養女の山下けんと引き継がれるが、大正8年に売却され「港屋」と屋号を変える。このころの写真が2枚目のもので、末廣亭の趣が残っている。





## 61. 羽衣橋（静岡市）



羽衣橋は、明治43年に、巴川河口と三保貝島（現在、日本軽金属のあるところ）間に架けられた木橋。長さ518m、幅3.6mあった。当時、三保までぐるりと回って通っていた人たちに、ずいぶんと重宝がられたとのこと

とで、画像にも、大勢の人たちが、ぞろぞろ歩いているのが写っている。しかし、維持が大変だったのだろう、たった13年間で撤去されてしまった。しかし、その短い間だけでも、地元の人たちの利便だけでなく、このように観光名所として脚光を浴びた時期もあったことを、この絵葉書は物語っている。右端には最勝閣。近景の女性は鋤簾（ジョレン）で貝でも獲っているのだろうか。大正9年の記念印。

## 62. 三保の松原（静岡市）

漁夫白龍は、三保の松原のある松の木に美しい衣が懸かっているのを見つけ持ち帰ろうとする。そこへ天女が現れ、それは自分の羽衣だから返してほしいと言う。白龍が断ると、天女は羽衣がないと天に帰れないと歎き悲しむ。その哀れな様子に



心を打たれた白龍は、天人の舞を見せてくれれば衣を返すという。天人は喜んで、月の世界での生活の様子や、三保の松原の春景色はその天界にも勝るものと謡いながら袖を翻して舞を舞う。しばらくして富士の山よりも高く、霞んだ空の彼方へと消え失せた…

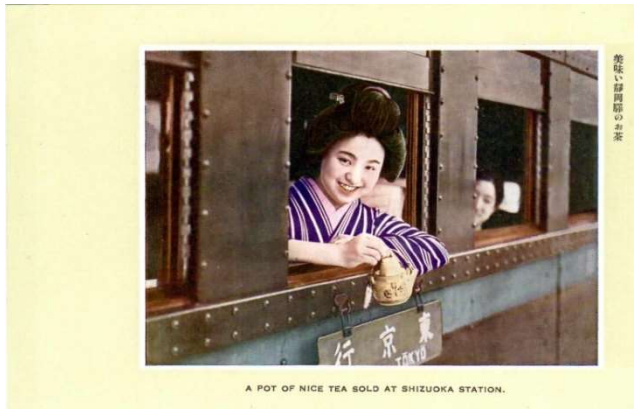
羽衣伝説の浜は、今でも世界文化遺産・富士山の構成遺産の一つとして、優美な景観をとどめる。先端の白い灯台は明治時代に造られた日本で最初の鉄筋コンクリート造の灯台で、歴史的文化的価値が高く、Aランクの保存灯台とされている。

### 63. 三保貝島（静岡市）

三保松原貝島の富士。海苔の養殖筏が見える。現在このあたりは埋め立てられ、日本軽金属・中山製綱などの工場が立ち並んでいる。手前は貝島渡船の舢舨(はしけ)。



### 64. 駅売り茶第1号（静岡市）



明治22年に東海道線が全通し、そのころ静岡駅に出入りしていた弁当業者（現在の東海軒）が、プラットホームでお茶を立ち売りした。「山は富士 お茶は静岡」と書かれた信楽焼の土瓶に入っていて汽車土瓶と呼ばれ、これが全国の駅売り茶第1号となった。

### 65. 安倍川橋（静岡市）

明治4年(1871)「渡船、架橋の許可を与える太政官布告」が出され、これを受けて安倍川近くの弥勒の戸長宮崎総五は有料橋建設事業に着手する。もともと宮崎家は、代々川越の総取締役の家柄で、静岡藩が許可を与えたのは、川越人足400人の失業対策もあったという。



宮崎は架橋の大事業を官費の補助を受けず、工期半年、7,000円の工事費をかけ、独力で成し遂げる。こうして明治7年(1874)3月24日「安水橋」が完成。延長は280間(約504メートル)、幅2間(約3.6メートル)。橋銭は徒歩が4厘、馬車は4銭5厘だったが、これはかつての川越人足に支払う額の半分であった。

こうして、工費はその後の通行料でまかなうという初の有料橋ができたが、度重なる出水による橋脚の破壊などで維持が困難となり、明治29年静岡県に移管され無料とされた。そのころの写真である。郷土出版社刊「静岡市いまむかし」では「2代目安水橋」とされている。

## 66. 薩埵峠（静岡市）

薩埵(た)トンネルから出てきた下り蒸気機関車。

薩埵峠越えの道は3ルートあった。江戸時代以前は潮が引いたときに波打ち際を駆け抜けるしか方法がなかったが、明暦元年(1655)に朝鮮通信使のために崖に道を切り開き、これを「中道」とした。その後新たに山中に道をつくり、「上道」とした。ところが、幕末の安政の大地震が起きて崖周辺の海岸線が隆起したため(ここに見える海岸部分)、人々はここを通るようになった。

現在では中腹を東名高速道路が貫き、また、国道1号バイパスの高架が走り、景観は一変した。



(製糖真野田製) 土 宮 の 峠 薩 埵

## 67. 静岡歩兵第34連隊（静岡市）



隊 第 四 十 三 兵 歩 騎 静

日露戦争の遼陽会戦は熾烈を極め、日本軍2万3千の死傷者を出す激戦だった。その中で静岡歩兵第34連隊は関谷大佐連隊長、橘中佐大隊長を始め多数の戦死者を出し、軍旗も布地は失われ旗竿と房を残すだけだったという。橘中佐はのちに陸軍の軍神とされ、1927年には宮門右上に橘周太像が設置される。現在は御殿場の板妻駐屯地が陸上自衛隊第34普通科連隊として、静岡歩兵第34連隊の伝統を受け継いでいる。

## 68. 御殿場付近（御殿場市）



まだ丹那トンネルができる前、東海道線は今の御殿場線を通っていた。鉄道院 2120 形と思われる、石炭庫と水槽をエンジンと同体としたタンク機関車が写っている。

御殿場線は 1/40 の急勾配のため（40m 進むごとに 1m 上る）、列車の前後に機関車が付いて前牽き、後押しで運転されていた。とくに山北から駿河小山までは大小 8 ヶ所のトンネルがあったため、2120 形のような強力なタンク機関車は下り列車に対してはバックで使用されることが多かったようだ。この写真は、足柄～御殿場間で、下り列車の後部補助機関車を、列車の後部から写したもの。

なお、この絵葉書は、満州の遼陽駅で働く友人あてに投函されたものであり、明治 43 年 7 月 6 日午後 4 時の発信印、同月 11 日午後 10-12 時着の到着印がある。静岡 34 連隊の橘中佐の奮戦の六年後、乃木大将とステッセル將軍との水師營の会見のわずか五年後のことである。

この写真を見た同時代の人々は、列強ロシアを破った驀進するアジアの一等国日本を、この写真の風景に重ね合わせて見ていたのかもしれない。



## 69. 御殿場市街（御殿場市）



画面左右に街道。左手奥に集落。

明治38年8月24日の差出日と、9月1日の消印があるので、明治中期の御殿場の様子と思われる。

## 70. 萩原（御殿場市）

1908年のSOUVENIRスタンプ。このように手彩色絵葉書は、日本を訪れた外国人の土産となった。

キャプションは「萩原ヨリ富士遠望」。現在では辺りは市街地化し、市民会館や図書館、ショッピングセンターなどがある。箱根裏街道沿いか。



## 71. 御殿場の富士（御殿場市）

御殿場の富士。  
大正時代ごろ。道路にはワダチがついているが、これはどうやら、納屋の前の荷車をひいた跡のようだ。納屋にはトウモロコシが干してある。母屋は、富士山からの冷たい吹き降ろしを避けるよう建てられており、兜造の屋根なので養蚕がおこなわれていたようだ。仁杉～中畑付近の撮影と思われる。



## 72. アメリカ村（御殿場市）



アメリカ村は、明治末期より大正中期まで静岡県御殿場市二の岡地区に所在した。

御殿場市史によれば、アメリカ村ができた経緯には、次のような話が伝わる。

明治24年5月、イギリス人バンデングが箱根で植物

採集中、迷ってしまい、農夫に助け出され、二の岡へ下りてきた。たまたま目についた三階家の養蚕室が気に入り、夏に別荘として借りることを申し込んだ。以降、外人が別荘を構えるようになり、明治30年、同地に別荘を建てたアメリカ人レーマンの提唱により、アメリカ村と名付けられたという。

なお、二の岡ハムによれば、当地でハム・ソーセージの生産が盛んなのは、彼ら宣教師たちが養豚を始め、ハム、ソーセージ等の食品加工法を地域に伝授したのがきっかけだという。

### 73. 太郎坊（御殿場市）



御殿場から太郎坊までの乗合自動車をはじめて運転されたのは、大正3年の夏で、ドイツ式8人乗自動車3台が使用された。

### 74. 佐野瀑園（裾野市）



約一万年前の新富士火山三島溶岩流の末端に形成された滝。本流の西には三条の滝(雄滝)、東には二条の滝(雌滝)がかかり、左から、雪解、富士見、月見、銚子、狭衣という名がつけられ、これが五竜の滝の名のもととなった。

ここには五竜館というホテルが建てられ、佐野瀑園とよばれ、大正・昭和天皇も、それぞれ皇太子時代に来訪されている。また、新田次郎・若山牧水も何回かこの地を訪れ、新田次郎は小説「蒼氷」を、牧水は歌集「麦の秋」・「野なかの滝」・「溪間の春」を創作した。



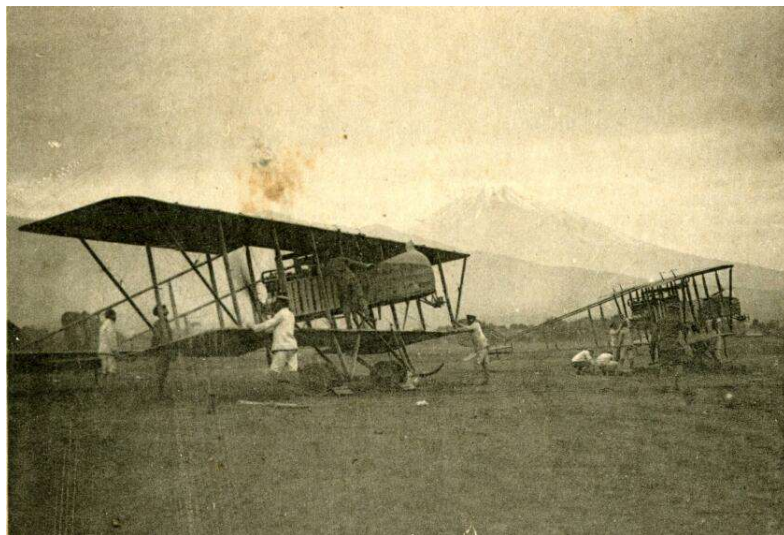
「富士が嶺や すそのに來り 仰ぐとき いよよ親しき 山にぞありける」 (牧水)

## 75. 水上の富士（三島市）



「小浜山の暮雪」「賀茂川の螢」「大社の群鳥」「間眠の夜雨」「広瀬の秋月」「広小路の晩鐘」「千貫樋の夕景」と並び、江戸時代から三島八景の一として並び称されてきた「水上の富士」。現在の白滝公園付近。明治40年ごろ。藁屋根の左上に、三島高等女学校(現、三島北高等学校)の校舎が見える。

## 76. 複葉機飛来（三島市）



「三島ニ於ル飛行機陣地」。珍しい推進式の陸軍モ式六型飛行機。大正6年から10年にかけて134機が製作された。三島では大正8～9年にかけて野戦重砲兵連隊を誘致したが、その直後に舞い降りたものと思われる。

飛行機が最新の近代兵器であった時代、この地における連隊創設の示威効果を狙ったものか。



## 77. 農兵踊り（三島市）



現在の白滝公園。三島郷土館「企画展 農兵節と平井源太郎」によれば、この写真が撮影されたのは昭和9年ごろ、日本コロムビアから農兵節がはじめてレコード化された年である。

この年は丹那トンネルの完成により三島駅が開業した年でもあり、

平井源太郎により農兵節は大々的に広められた。

右手碑文には「富士の白雪朝日で溶て 三島女臈衆の化粧水」とあり、建碑されたのは昭和7年10月。

もともと三島の花柳界は野戦重砲兵連隊でにぎわっていたが、そこで盛んに唄われていたノーエ節をさらに洗練し、幕末の三島で行われていた農兵調練の行進曲のイメージに結び付け売り出したのが農兵節という。

右は三島の女臈衆。



## 78. 新町橋（三島市）



東海道を江戸から上ってくると、箱根を超えて三島宿に入る手前に、神川（現、大場川）に架かる新町橋がある。その橋脚下から見た富士。

快晴の日には素晴らしい富士山の姿が見えることで古くから知られており、歌川広重も

ここから見た雪景色の富士山を「佐野喜版狂歌入り東海道五十三次三島」に描いている。

仕切り線が1/2なので、大正～昭和のはじめの撮影。

## 79. 反射炉（伊豆の国市）



幕末期の伊豆代官であった江川太郎左衛門英龍は、国防の重要性を幕府に建議し、勘定吟味役となりお台場築造に着手する。さらに大砲鑄造に必要な反射炉の築造に着手したものの、業半ばで他界。そこで長子英敏が父の遺業を継ぎ、安政4年に反射炉の完成を見る。ここで鑄造された大砲は、品川台場に使われた。ほぼ完全な形で現存する反射炉としては、我が国唯一のものである（写真右下）。この反射炉は、2015年、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成遺産となる。

さて、富士山の手前は愛鷹山。さらにその下に右側から突き出た黒っぽいゆるやかな山稜があるが、江川邸は、その向こうに位置する。また、その山稜の富士山下あたりの位置に、葦山城があった。秀吉の小田原征伐の際、北条氏規守るこの城は、4万の敵勢に囲まれながらも3百余の寡兵で4ヶ月間も耐え、結局、今川人質時代よりの旧知の仲である家康の説得により開城、氏規はいったんは高野山へ入るが、その後許され、河内狭山に後北条家の血筋を残す。

さらに、その葦山城から下りたすぐ左手の平野部分には史跡「蛭ヶ小島」がある。

平治の乱で平清盛に敗れ捕らえられた源頼朝が、清盛の義母池禅尼の命乞いによって流された地で、当時は蛭の多い湿地帯だったという。頼朝は14歳から旗挙げする34歳までをこの地で過ごし、北条政子とも結ばれた。頼朝が青年期に過ごした原風景がここにはある。

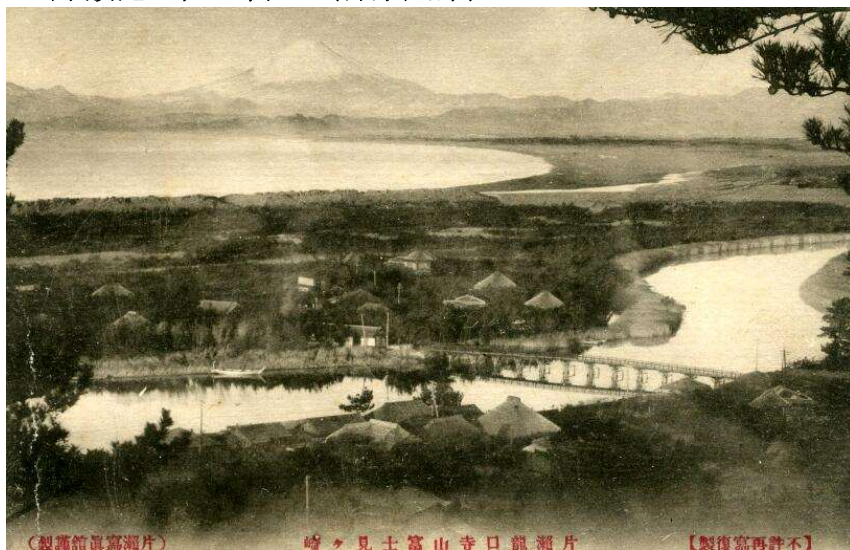


### 80. 二見が浦の富士（三重県）

明治末に撮られた伊勢二見浦曙の富士。ここからは、夏至の日ちょうど富士山の真上から太陽が昇るそうだ。明治 45 年 7 月 12 日の記念印。



### 81. 片瀬滝口山の富士（神奈川県）



よく晴れ渡り、富士がくっきりと迫ってくる。家々が藁葺きで、仕切り線が1/3なので明治後期ごろの撮影と推定。

### 82. 稚児ヶ淵の富士（神奈川県）

東海の富士としては珍しい荒々しい怒涛の富士。

稚児ヶ淵は関東大震災の地殻変動によってできた岩場で、神奈川景勝 50 選にも選ばれている。



### 83. 高麗山（平塚市／大磯町）



東海道を京へ上っていくと、はじめ富士山は高麗山（こまやま）からずいぶん右手に離れて見えるが、平塚宿を出たところから急速に近づきはじめ、古花水橋交差点（平塚宿京方見附）付近で高麗山に隠れる。そのあたりからの景を実際に目にしたうえで、広重は「東海道五十三次之内・平塚」を描いたものと考えられている。

現在、高い家並みが邪魔になって、この写真どおりの景観を見るのは難しい。

「高麗」とは、唐と新羅に滅ぼされた高句麗からの渡来人がこのあたりに住み着いた場所からで、その後、彼らは武蔵国高麗郡（現在の埼玉県日高市）に移住させられたという。ふもとの釜口古墳（7世紀末～8世紀初）の石室の見事な切石積には、渡来人の高度な技術がみてとれるという。

#### COLUMN

#### 著作権について

絵葉書の著作権は、もともと撮影者または発行者にあります。50年経過後、著作権は消滅します。一方、最初のオリジナルの所有権は、当然、50年経過後も撮影者または発行者にありますから、オリジナルを使用する場合には、使用許諾を得なければなりません。

しかし、オリジナルを使用せず、複製物として発行された個々の絵葉書のほうを使用する場合には、著作権が消滅した50年後には、個々の複製物の所有者の使用権と使用許諾権だけを考えればよいことになります。

なお、本書で掲載した古絵葉書は、すべて著者所有の絵葉書であり、すべて昭和8年以前の印刷物からの転載です。

#### 84. 君津橋（木更津市）



現在、木更津市内を流れる矢那川にかかる證誠寺橋から撮られたもの。證誠寺橋は昭和12年まで君津橋と呼ばれていた。右手に見えるのが、たぬき囃子で有名な證誠寺の堂宇。現在でも、このあたりの地名を「富士見」といい、晴れた日には橋からこの写真の方向に富士の眺望を楽しむことができるとのこと。

#### 85. 奥宮



富士登山は麓の俗界から山中にわけ入り、心身を清め、艱難辛苦の末、ようやく山頂の浄土に辿り着き、そこから帰ってくることで、清浄無垢に生まれ変わるのだと考えられた。これが「六根清浄」である。白の行衣、金剛杖。

## 86. 富士山郵便局



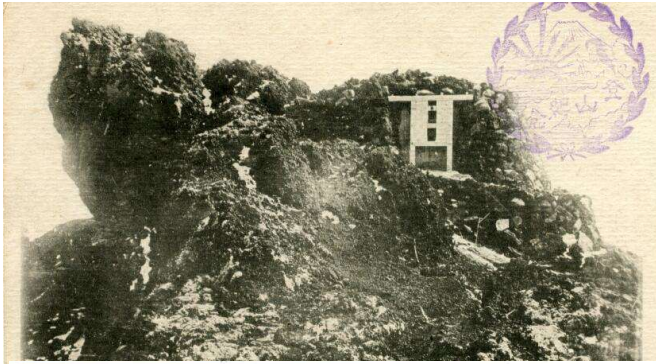
わが国初めての季節郵便局である富士山郵便局が、明治39年7月31日に開局。この年は9月10日まで開局していた。

## 87. 東宮殿下登山



昭和天皇は東宮時代、大正12年7月27日、須走口より登山された。まず乗馬で八合目に至り、そこからは徒歩で久須志神社へ。さらに奥宮で参拝。伝書鳩十数羽を放鳩。午後1時に奥宮を出発され、お鉢巡りをされたのち、午後2時30分、御殿場口より勢いよく下山された。

## 88. 野中観測所



野中至は明治二十八年(1895)、富士山頂剣ヶ峰に自費で木造六坪の観測所を建て、富士山頂冬期気象観測を実行した。この壮挙は中央气象台(現在の気象庁)による「富士山頂観測所」の建設の礎となった。

野中至の著「富士案内」にも、上掲の写真と同じ観測所の図が描かれており、東西二間、南北三間、棟の高さ九尺であった。

至の入山後、妻・千代子は、夫の身を案じ、山頂の観測所を訪ねる決意をする。芙蓉日記には「此度(このたび)良人(をっと)の富士山頂に籠り給ふにつけ、妾(わらは)もせめて御供にと心の願ひを打明し委(くは)しく告げ参らせれば、御二親はかなしげなる御けしきもなく、そは勇ましきことにこそ。なべて婦(をんな)の道として命ちにかけて夫(つま)を助けん事、昔しの聖りの教へぞかし。かからん時に逢竹(あひたけ)の心のふしを尽くさんこそ真との婦とも云ふべけれ…と仰せられ」と記し、勇躍、富士山頂の至のもとへ押しかける。明治28年10月12日のことである。

千恵子は、その後、至の観測を手伝うが、二人は厳冬期の厳しい生活の中で病に冒され、至は脚気で歩行困難に陥ってしまう。身を案じて登ってきた气象台の和田技師の下山の説得に、至は「僕(やつがれ)が願ふところは将来大きやかなる帝国气象台を建てんことにぞある…が今屠腹して此処に死するも更に憾みを遺す事は候はず、今僕(やつがれ)下山しなば、世人は富士の越年は及びなき望みにて、なし難きわざよと誤り信じ、終には後には建設(たてまう)けなん事のさはりとなりもやせんと思へば」と、かたくなに下山を拒否する。しかし、必死の説得に折れ、ついには下山を決意するのである。明治28年12月22日のことである。

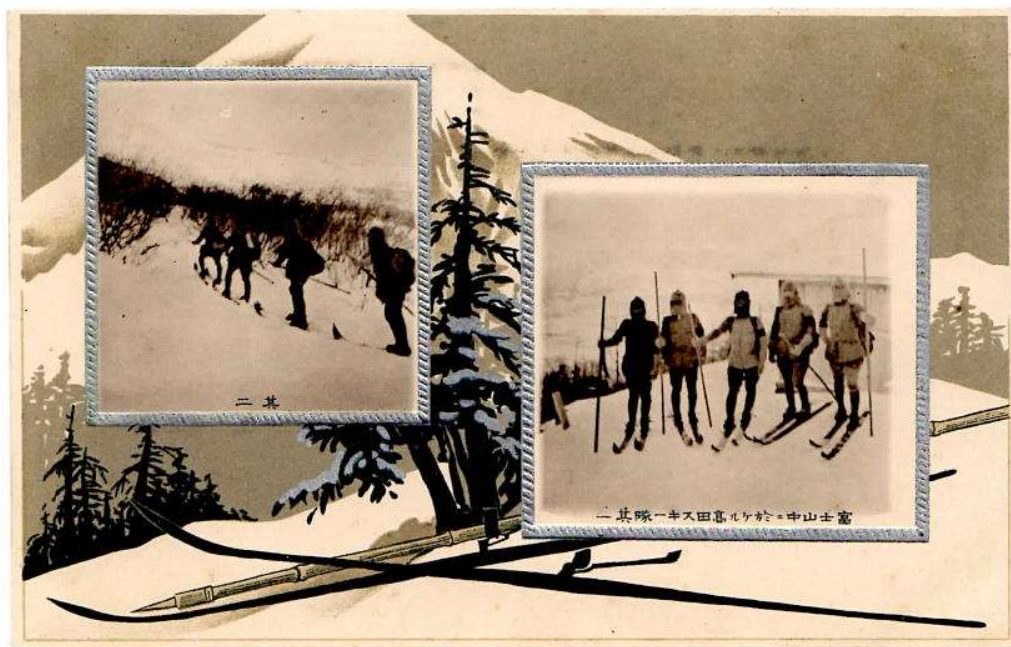
千恵子は、その後、至の観測を手伝うが、二人は厳冬期の厳しい生活の中で病に冒され、至は脚気で歩行困難に陥ってしまう。身を案じて登ってきた气象台の和田技師の下山の説得に、至は「僕(やつがれ)が願ふところは将来大きやかなる帝国气象台を建てんことにぞある…が今屠腹して此処に死するも更に憾みを遺す事は候はず、今僕(やつがれ)下山しなば、世人は富士の越年は及びなき望みにて、なし難きわざよと誤り信じ、終には後には建設(たてまう)けなん事のさはりとなりもやせんと思へば」と、かたくなに下山を拒否する。しかし、必死の説得に折れ、ついには下山を決意するのである。明治28年12月22日のことである。

## 89. 富士山上の夕照

幽玄の世界へ。六根清浄の行は続く。



## 90. 高田スキー隊



大正3年1月14日の撮影。金井勝三郎ほか6名からなる高田スキークラブが滑走するも、吉田口8合目で氷上滑落死が起きてしまったため中止。絵葉書は、この事故直前の報道絵葉書で、決死の覚悟の壮挙を伝える。富士山における山岳スキーの最古の記録写真の一つ。

資料によれば当時のスキーのスタイルは、1mぐらいのケヤキやクリ材の一枚板に金具(ビンディング)をつけ、ストックがわりの竹竿1本だけ使って滑走するスキー術であったとされているが、写真を見ると板の長さは170cmくらいありそうで、また、背景の絵の竹竿ストックの先にはピックが描かれている。

明治44年1月、オーストリア=ハンガリー帝国の軍人レルヒが、越後高田で日本で初めて本格的なスキー指導を行ない、我が国におけるその後のスキー発展の基礎をつくったので、高田は「スキー発祥の地」とされている。しかしレルヒ来日以前、オーストリアのレッツェルホーラー商社の駐在員クラッツェルが、明治42年12月、太郎坊で山岳スキーを行っている。国際スキー連盟のホームページによると、1909年「25 December. Austrian Egon Edler von Kratzer made first Japanese ski tour. Alpine Skilaut in Japan. Der Schnee IX 24. 4 April 1914, 207.」となっている。

このことから、御殿場市は「日本初スキーの地」といえよう。

御殿場口登山道入口脇にある、御殿場市の「日本初スキーの地」記念碑





## 91. 剣が峰



バルビゾン派の流れを汲む画家たちに教えを受けた浅井忠や黒田清輝の画風を意識したものか。光と影が、峰に佇む人物をさらに雲上に誘うかのようだ。左下に小さく人物を入れ込んだのも良い。

## 92. 砂走



通信文の記載部分が 1/3 なので、明治末ごろの撮影。

菅笠をかぶった先達をリーダーとして、助手がそりをひき、帽子をかぶった洋装の少女が乗っている。当時のことであるから、良いところのお嬢さんなの

だろう。後ろの二人は菅笠をかぶっておらず、お嬢様お付きのお供なのかもしれない。それにしてもどうだろう、先頭に行く先達の飄々とした足取りは。背中が曲がっておらず、目線は前。一步一步を斜面に突き刺しながら軽妙に降りていく。わずかに晴れた雲間からはるか愛鷹山方面がのぞいているのも、雲上の世界をひきたたせ面白い。

「あとかき」にかえて

いかがでしたか。

百年前の人々と同じ目線に自分を置いてみたとき、その何とも言えない”安らいだ気持ち”は、いったいどこからもたらされるものでしょうか。

美しい富士の山容でもなければ、ノスタルジーでもない……あれこれ考えあぐねた末、それは、”時代を超越した富士の恵みの普遍性”とでもいうべきものなのでは…と思い至りました。

富士は、一人ひとりの様々な心の表情を投影します。時代を越えて、今も昔も。その懐の深さこそが、富士の恵みであり、文化的価値を認める心の源であるといえるのではないのでしょうか。

最後までお付き合いいただきまして、有難うございました。

## 主な参考文献

- 鈴木富男『東海道 吉原宿』1995年 駿河郷土史研究会  
沼津市明治資料館『企画展 絵葉書に見る沼津の名所』2001年  
鈴木富男・奈木盛雄『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 富士』1985年 国書刊行会  
小野真一『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 沼津』1984年 国書刊行会  
沼津市明治資料館『蘭契社 明治41年発行 沼津の栞』(復刻版)1984年  
若林敦之監修『写真集 静岡県の絵はがき』1993年 羽衣出版  
吉原市史編纂委員会『吉原市史』1972年  
『富士市史』富士市役所 1969年  
沼津市史編纂委員会『沼津市史』1961年 沼津市  
『浮島が原開拓史』1953年  
矢部新作『明治末期の吉原町の地図と思い出』1980年代  
遠藤秀雄・辻真澄『富士・富士宮・沼津・三島・駿東歴史散歩』1987年 静岡新聞社  
富士市立中央図書館『子どものための郷土資料』1997年-  
辻真澄・渡辺好洋監修『目で見る沼津・駿東の100年』1993年 郷土出版社  
鈴木憲二監修『写真集 沼津いまむかし』1987年 郷土出版社  
大日本帝国陸地測量部『五万分の一地形図 吉原』1934年  
鈴木富男『鈴川の歴史』1981年 鈴川区管理委員会  
野中至・野中千代子『富士案内 芙蓉日記』2006年平凡社(復刻版)  
静岡新聞社『静岡県鉄道物語』1981年  
吉原市教育委員会『吉原市の古墳』1958年  
富士市立博物館『新市20周年記念展 写真に見る富士の今昔』1986年  
富士市立博物館『第四十二回企画展 描かれた富士のふもと』1995年  
富士市立博物館『第四十七回企画展 富士川を渡る歴史』2009年  
蘭契社『沼津の華』1901年  
静岡市『静岡市史』1978年  
辻真澄『沼津三島清水町 町名の由来』1992年  
御殿場市『御殿場市史』1974年  
富士市教育委員会『善得寺の研究』1989年  
緑星社『目でみる庵原の歴史』1978年  
緑星社『目でみる富士の歴史』1975年

こえはがき  
**古絵葉書に見る東海の富士**

2017年6月20日 改訂第3版発行

編集・発行 市川博康

e-mail: fujitopian1@ybb.ne.jp

※本書掲載の古絵葉書は、すべて著者のコレクションからの掲載であり、いずれも発行後50年を経過したものです。

※ご要望により教育機関等で出前上映会を致します。ご連絡ください。

Copyright © Ichikawa Hiroyasu,  
All Rights Reserved.